

総 説

コロナ禍における日本人間性心理学会年次大会の開催と 今後の展望について

榎 本 光 邦¹⁾

The Annual Meeting of the Japanese Association for Humanistic Psychology and its future prospects in the COVID-19 pandemic

Mitsukuni Enomoto¹⁾

要 旨

日本人間性心理学会第39回大会は、新型コロナウイルス感染症の影響を考慮し、従来の参集する形式ではなく、Zoomによるオンライン形式で開催された。「今、ここで」起こる体験を重視する人間性心理学会の年次大会をオンライン形式で開催することについて賛否があったが、今後の人間性心理学の実践や、日本人間性心理学会の年次大会の開催について検討する良い機会となった。第39回大会の開催を通し、人間性心理学の実践や、学会の年次大会の開催は対面形式とオンライン形式を組み合わせることで、人間性心理学会の目的をより多角的に達成することが期待された。

キーワード：日本人間性心理学会、人間性心理学、コロナ禍、新型コロナウイルス感染症

I. はじめに

日本人間性心理学会第39回大会は、2020年9月4日から9月6日までの日程で、群馬パース大学（群馬県高崎市）を会場として開催される予定であった。大会準備委員会発足当初は、従来通り会場校である群馬パース大学に参集する形での開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の影響が収束しない状況を鑑み、一部ワークショップを除きZoomによるオンライン形式で開催する運びとなった。2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響下という未曾有の事態の中、全ての心理学系の学会は対面での年次大会開催を断念し、オンライン形式あるいは誌面形式で大会を開催している（2020年12月現在）。人間性心理学は実践的・臨床的活動を特徴として発展してきた。その中でもエ

ンカウンターグループやフォーカシング、さらにボディワーク等の身体技法は「今、ここで」起きていることを大切にしている。そのため、体験やプレゼンス（人がまさにそこにいるということ）を基盤とする人間性心理学の学会年次大会をオンライン形式で開催することについては批判の声もあることが推測された。しかし、大会準備委員会は大会参加者の安全を最優先しつつも、会員の研鑽や研究発表の機会を確保することを至上命題と考え、オンライン形式での大会開催を決定した。最終的に、大会参加者は合計208名（正・準会員149名、臨時会員50名、学生会員5名、賛助会員4名）で、大会主催ワークショップには58名（正・準会員30名、臨時会員27名、学生会員1名）が参加した。いずれも例年の三分の一程度の人数ではあったが、大会は大過なく、盛況のうちに閉会を迎えた。

1) 群馬パース大学教養部

新型コロナウイルス感染症の影響が収束するめどが立たない現状を考えると、2021年度もオンライン形式で大会を開催する学会は多いと考えられる（日本人間性心理学会第40回大会はオンライン形式での開催が決定している。また、日本学生相談学会第39回大会は参集する形式と完全オンライン形式の両方を想定して準備が進められている）。本稿ではこれまでの人間性心理学や日本人間性心理学会のあゆみについて紹介するとともに、日本人間性心理学会第39回大会をオンラインで開催するまでの経緯や第39回大会の概要に触れ今後の人間性心理学や日本人間性心理学会の在り方についての展望を述べたい。

II. 人間性心理学の歴史

心あるいは精神とは何かという問題は、長い間哲学において取り組まれていた。1879年に Wundt, W. がライプツヒ大学に心理学の実験室を作ったことをきっかけに、心理学は実証的な科学として哲学から独立した。Wundt, W. は精神の本質を主体的な体験である「意識」であると考え、これを科学的に研究するために、徹底的な自己観察、すなわち内観（introspection）を用いた。20世紀の心理学は、Wundt, W. の実験的手法に敬意を払いながらも、彼を批判することで発展を遂げた。その中でも行動主義心理学と精神分析は、1950～60年代のアメリカ心理学界の勢力を二分した。行動主義心理学は、Watson, J. B. らが提唱したもので、人間を客観的かつ科学的に研究することを目指していた。そのため、Watson, J. B. は Wundt, W. が研究の対象とした「意識」は主観的なものであり研究の対象とはなり得ないと批判し、客観的に観察が可能である「行動」を研究の対象とした。精神分析は Freud, S. によって創始された人間の心を研究する方法であり、理論であり、精神疾患や不適応の治療法である。Freud, S. は、人の精神は意識のみならず無意識が大変重要で、意識をいくら分析しても理解することはできないと主張し、意識を研究の対象とする Wundt, W. の手法を批判した。

その後、1960年代に Maslow, A. H. は行動主義心理学を第一勢力、精神分析を第二勢力とし、それに対抗する第三の勢力として「人間性心理学」を立ち上げた。

この時期に人間性心理学が誕生した背景には、当時の社会やアメリカ心理学会の状況が影響している。1950年代半ばのアメリカは、未曾有の経済発展を遂げ

ていた一方で、体制に反旗を翻すムーブメントも見られた。1960年代に入るとアメリカはベトナム戦争の惨禍に陥り、フラワー・ムーブメントのように平和と人間性回復を願う動きが広がっていた。また、この頃のアメリカ心理学界は前述の通り行動主義心理学と精神分析が勢力を二分していたが、当時の心理学者の中には、行動主義心理学と精神分析の双方に疑問や不満を持つ者もいた。そのような心理学者たちは、第一勢力（行動主義心理学）に対しては「人間を機械論的なシステムとして捉えすぎる」「人間と他の動物を区別せずに比較心理学的な研究姿勢を持っている」「人間独自の心理機能や特性が軽視され、人間固有の存在様式（実存）が見落とされてしまう」と、第二勢力（精神分析）に対しては「神経症や精神の発達障害など人間の病的で異常な側面ばかりが研究対象となっていた」「正常で健康な人間の精神や発達には全く関心を払ってこなかったという点が偏り過ぎている」と批判し、社会で生活する大部分の人たちに適用でき、自己実現の本性を持つ人間の心の個性や特質を研究しようとした。

そのような心理学者がどちらの立場にも依らない論文を投稿しても、なかなか学会の学術誌に掲載されないという事態が発生しており、その一人が、人間性心理学を立ち上げた Maslow, A. H. であった。そこで Maslow, A. H. は対抗手段として、主流派心理学に批判的な研究者と連絡をとるようになった。そして、1954年には、それぞれの論文のコピーを交換できる125名のメーリングリストを作り上げた。1961年には『人間性心理学ジャーナル (*Journal of Humanistic Psychology*)』の編集委員会が組織され、創刊号が刊行された。そして1963年にはフィラデルフィアで「人間性心理学会 (The Association for Humanistic Psychology)」が創設された。この会のメンバーである Maslow, A. H.、Rogers, C. R.、Rollo May らが人間性心理学の立ち上げに尽力した（中野、2019）¹⁾。

その後、人間性心理学は1970年代に普及段階に入ったが、現在ではそれほど有力な心理学の流れではない。1960～1970年代は、心理学の分野が多様化し細分化した時期で、人間性心理学が取って代わろうとしていた行動主義心理学や精神分析はそれほど主流で強力な勢力ではなくなっていた。アメリカ心理学会 (APA) の人間性心理学部会 (第32部会) は、人間性心理学を“ロジャースら先駆者たちの業績や実存主義哲学および現象学に基づいて20世紀中葉に台頭してきた心理学であ

り、意味、価値、自由、悲劇、個人の責任、人間の可能性、スピリチュアリティ、自己実現の探求等を通して人間存在への全体的接近を図ろうとする立場である。……人間性心理学は人間の経験の全範囲に誠実であることを目指している。その基礎には哲学的な人間主義や実存主義、現象学が含まれている。科学および専門職としての心理学において、人間性心理学は、人間存在を研究する体系的で厳密な方法を開発し、より包括的で統合的なアプローチを通じて、現代心理学の断片的な性質を正すことを目指す (APA²⁾。”と定義しているが、多様な流派や立場を一括りにしているため、人間性心理学とは何かを明確に定義するに至っていない。しかし、人間個人の生きる意味や人それぞれの人生の価値を個別に真摯に探究しようとする人間性心理学の精神は、臨床心理学やカウンセリングの分野に、今なお根強く息づいているといえる。

Ⅲ. わが国における人間性心理学の誕生

かつては、日本心理学会に所属する者の約半数以上が臨床心理学の専攻者であった。しかし、臨床事例研究や臨床的課題を扱った論文は、日本心理学会の機関誌『心理学研究』や、日本教育心理学会の機関誌『教育心理学研究』に掲載されることは殆どなかった。当時の日本の心理学会を代表するこれらの学会誌は、統計的・実験的論文で占められていた。その論文題目を見ても、およそ人間の問題に正面から取り組んでいると思われるものは少なく、重箱の隅をつつくようなものが多い。人間そのものをテーマとする研究は、どちらかといえば啓蒙的雑誌（例えば『児童心理』『青年心理』『教育心理』『教育と医学』等）や一般書としては刊行されるが、日本の心理学会を代表する学会機関誌に掲載されることは殆どなかった。

このような状況が生じた理由は、日本の心理学会の主勢力が自然科学的心理学を正当と考え、行動主義的に厳密な方法を採用しているもののみが心理学的に価値がある研究であると考えた結果に他ならないと考えられる。臨床的事例研究や、人間の問題を現象学的に、または現象記述的に捉えようとするよりは、人間現象のごく一部に限定して確実なデータをとり、それを統計的に解析し、考察を加えたものが優位に評価された。

現象学的考察や現象記述を行うためにはたいへんな熟達が必要であるが、統計的解釈は初学者にとっては熟達が容易であり、教えを得ることで簡単にできると

いう事情もあったと推測される。統計的な解析に基づく解析が優位に評価されたのは、“人間”を深くとらえるよりも、“科学”として認められやすかったという事情があったと考えられる。このことは、心理学専門研究者として大学に就職を希望したり、博士の学位を取得したりするには著しく不利を招いた。それは『心理学研究』や『教育心理学研究』といった日本を代表する研究誌に、論文がいくつ採択されるかは、心理学研究者としての評価に関わったからである。更に問題であったのは、心理学、教育心理学の専攻学生・大学院生が、研究課題にふさわしい研究方法や得られたデータの心理学的意味を深く考えることなしに、安易に数量化し、統計処理をする傾向が一般的に見られたことである。心理学研究の本質は、数量化や統計処理のみから成り立つものではない。

臨床心理学の研究者は、日本心理臨床学会をつくることによって実験心理学的、統計的數量化偏重の影響から脱出し、臨床事例研究を中心にして研究を進展させた。そして、アメリカにおける人間性心理学の発展に影響を受けた臨床心理学者たちは、単に臨床心理学の領域だけではなく、心理学に人間を取り戻し、心理学そのものを再体制化すべきだと考えた。

日本心理学会第42回大会（1978年10月）において開催されたシンポジウム「わが国におけるヒューマニスティック心理学の現状と課題」を契機として、毎年『ヒューマニスティック心理学研究会』としてシンポジウムが継続して行われた。そして、1982年に行われた第3回ヒューマニスティック心理学研究会を『第1回日本人間性心理学会』として創設したのが、現在の『日本人間性心理学会』の出発となった(畠瀬, 2012)³⁾。以後、日本人間性心理学会は、人間性を理解し、その回復と成長に貢献することを通じて、社会的に責任を果たし得る心理学の研究と実践を推進することを目的として運営されている(日本人間性心理学会)⁴⁾。

Ⅳ. 近年の日本人間性心理学会年次大会の動向

日本人間性心理学会年次大会は、1982年7月に第一回大会が開催されてから2020年まで、毎年開催されている。開催期間は最長で2010年9月24日～28日に開催された第29回大会（熊本大学）の5日間で、ここ数年は3日間の日程で開催されることが多かった。年次大会は、基本的には年度ごとに担当校を決め、近隣の学会員が協力し合いながら準備委員会をつくり、大会当

日まで運営するという形式がとられていた。しかし、近年、担当校を決める作業が難航し、第38回大会（2019年度）では担当校が決められず、日本人間性心理学会史上初めて理事会主催という形で大会の準備・運営を試みることとなった。学会理事は全国に分散しており、頻繁に集まって準備することが困難であったため、会期は2日間に短縮された。開催形式の是非について、様々な意見があったが、今後の年次大会のありようを考える契機となった大会であった。そして、第39回大会では、著者が大会準備委員長を拝命し、従来の形式で大会の準備・運営を行うこととなった。

V. 日本人間性心理学会第39回大会開催の経緯

日本人間性心理学会第37回大会（人間環境大学）の際に、著者は第39回大会準備委員長の任を打診された。群馬バース大学には著者以外の本学会員がおらず、近隣の大学にも協力を求められる学会員はいなかったのだが、本学会年次大会において、ここ数年『基礎心理学と人間性心理学の交差』と題したシンポジウムを著者と共同開催している会員に大会準備委員の任を依頼できたため、大会準備委員長の任を受諾した。

大会の準備が本格的に始まったのは2020年2月頃であった。3月中旬に大会のプログラムが確定、3月下旬より大会第1号通信の発送を開始し、4月1日より大会ホームページ上で大会・ワークショップの参加申し込みが開始された。この時点では、大会準備委員会は群馬バース大学に参集する形式で大会を開催することを目指していたが、それと並行して新型コロナウイルス感染症拡大の収束にめどが立たない場合はオンライン形式での開催に切り替えること、その際、参加者の発表の機会は何としても確保することなどの方針も立てられていた。そして、4月7日に緊急事態宣言が発出されたことを受け、これらの方針を大会ホームページ上で公開した。その後、新型コロナウイルス感染症の影響や社会の動向を注視し、大会での発表申込期間を1か月延長するなどの対応をしたが、最終的には参加者の安全を最優先し、5月29日にZoomによるオンライン形式で大会を開催すること、一部のワークショップや懇親会が中止になることを発表した。「今、ここで」起きていることを大切にしたい人間性心理学会の大会を対面で開催しないことの是非については様々な意見があると考えられたが、参加者の安全を最優先し、従来の人間性心理学の実践の在り方にこだわらず、

オンラインという新たな形で人間性心理学の実践を模索することとなった。

オンライン形式で大会を開催する他の心理学系の学会では、発表はテキストベースで行われ、事例発表は行われず、シンポジウムや講演は録画された動画を視聴する形が殆どであった。しかし、前述の通り、「今、ここで」起きていることを大切にしたい人間性心理学会の大会であるので、オンライン形式ではあっても録画やテキストだけを公開するという形はとらず、全てのプログラムをリアルタイムで行うことを目標とした。その結果、予定していたプログラムのうち、2つのワークショップ、懇親会が中止となったものの、それ以外のプログラムは開催できることとなった。また、オンラインでは開催が難しい身体感覚や微妙な表情の変化などを扱うワークショップ2コースについては、講師からの熱心な提案もあり、感染症対策を徹底することを条件に群馬バース大学に参集する形式で開催することとなった。また、他の研究会との共同プロジェクトであったRob Parker氏（フォーカシング指向心理療法家）の来日企画は中止となったものの、オンライン形式で講演を行うことに快諾をいただいた。また、口頭発表・ポスター発表において事例を扱うことについて議論がなされた。日本心理臨床学会等、事例検討を行う学会では、クライアントのプライバシー保護を考慮し、いかなる形でも事例は扱わない決定をした。日本人間性心理学会第39回大会では、大会準備委員会と学会理事会研究倫理委員会で協議し、①個人が特定できる情報は一切扱わないこと、②発表論文を査読する際に、査読者は①の基準が遵守されているか確認をすること、③発表の際、座長や大会スタッフは①の基準が遵守されていることを確認することを条件に、事例検討を許可することとした。

また、Zoomによるオンライン形式での開催に向け、Zoomの操作に不慣れな参加者が安心して参加できるよう配慮することが大きな課題となった。この課題に対しては、大会準備委員間で何度もシミュレーションを重ね、Zoomの操作マニュアルを作成し、更に大会前日にはプログラムへの参加の練習会を開催するなどの対応を行った。なお、本マニュアルは本大会終了後、第64回日本読書学会大会（2020年9月・Zoomによるオンライン開催）に提供されるなど、他の学会や研究会のオンライン開催にも役立てられている。

VI. 大会プログラム

日本人間性心理学会第39回大会は2020年9月4日～6日（一部ワークショップは9月3日から実施）の日程で、群馬パース大学に大会事務局を置き、Zoomによるオンライン形式で（一部ワークショップ・自主シンポジウムは群馬パース大学において対面形式で）開催された。大会テーマを「人間性心理学と他領域の交差」とし、ワークショップ6コース・自主シンポジウム4件・口頭発表17件・ポスター発表11件・大会主催講演2講演・奨励賞受賞記念講演・大会準備委員会企画シンポジウム・総会報告が行われた。大会スケジュールは以下の表1の通りである。

VII. 新型コロナウイルス状況下での人間性心理学の実践

オンライン形式での大会開催の準備を進める中で、大会準備委員会副委員長より「今、ここで」の体験を基盤とする人間性心理学の実践が難しいコロナ禍において、様々な方法で人間性心理学を実践している方々があり、そのような方々をシンポジストに迎えてシンポジウムを開催することは参加者にとって大きな力添えになるのではないかと提案があり、急遽、大会の最終日・最終セッションにおいて大会準備委員会企画シンポジウム「新型コロナウイルス状況下での人間性心理学の実践」を開催する運びとなった。本シンポジウムでは、様々な専門や業務形態における人間性心理学の実践について議論され、今後の人間性心理学の実

表1 日本人間性心理学会第39回大会プログラム

9月3日(木) 会期前 10:30~16:30		
10:30~16:30	大会主催ワークショップ ベーシックエンカウンター グループ（1日目）	
9月4日(金) 大会1日目 10:30~19:00		
10:30~16:30	大会主催ワークショップ（6コース）	うち2コースは群馬パース大学で実施された。
17:00~19:00	自主シンポジウム（4件）	うち1件は発表者の大部分が大会準備委員だったことから、群馬パース大学の教室を会場とし、発表を行った。その際、ワークショップに参加した大会参加者で聴講を希望した方や、ワークショップ講師にはオンラインではなく、対面で発表を聴講していただいた。
9月5日(土) 大会2日目 10:00~17:30		
10:00~17:30	口頭発表17件 ポスター発表11件	
9月6日(日) 大会3日目 9:00~16:20		
9:00~10:30	大会主催講演Ⅰ “Focusing Oriented Psychotherapy and Complex Trauma”	講師：Rob Parker氏（フォーカシング指向心理療法師） 司会：宮田周平氏（鎌倉女子大学）
10:40~12:10	大会主催講演Ⅱ “認知行動療法と人間性心理学の交差”	講師：原田誠一氏（原田メンタルクリニック院長・東京認知行動療法研究所） 司会：伊藤研一氏（学習院大学）
13:10~13:30	2020年度総会報告	学会賞受賞挨拶 池見 陽氏（関西大学大学院）
13:40~14:40	学会奨励賞受賞記念講演 “臨床と有機体、主体、応答性”	演者：久羽 康氏（駒澤大学） 司会：金子周平氏（九州大学）
14:50~16:20	大会準備委員会企画シンポジウム “新型コロナウイルス状況下での人間性心理学の実践”	シンポジスト： 三國牧子氏（九州産業大学） 堀尾直美氏（フォーカシング・ネットワーク） 下田節夫氏（幡ヶ谷カウンセリングルーム） 司会：榎本光邦氏（群馬パース大学）

践に対する示唆に富んだセッションとなった。以下に、本シンポジウムで述べられた意見の要約を示す。

Ⅷ. 今後の人間性心理学の実践や学会大会の実施について

日本人間性心理学会第39回大会を終え、大会準備委員や大会参加者から「オンラインであっても、人間性心理学の実践は可能だと感じた」という感想が多数述

表2 大会準備委員会主催シンポジウム「新型コロナウイルス状況下での人間性心理学の実践」のまとめ

【オンラインでカウンセリングや心理療法の個別セッションを行うことについて】
・初めのうちは、クライアント（以下 C1 と表記）の表情や仕草など、ノンバーバルな情報が得にくいのではないかとという心配があったが、実際には対面の時よりも表情がはっきりと見えたり、C1 の一挙手一投足を見逃さないようにしようとしたりして対面の時よりも多くの情報が得られることが多い。
・対面の時よりも、C1 とカウンセラー（以下 Co と表記）の間に物理的・心理的距離ができるので、対人緊張が強い C1 のカウンセリングを行う時は、対面の時よりもスムーズにできた。
・対面形式の際は、C1 と Co が正面から向き合わないよう、座席の位置を工夫しているのだが、オンラインの場合、パソコンの画面を通して面と向き合うので、対面の時よりも C1 と Co の距離が近いように感じられた。
・自宅でオンラインカウンセリングを行う場合、家族が部屋に入ってきたり、荷物が届いたりするなど、面接の構造を脅かされることがある。
・対面の面接であれば、C1 は移動の際にその日のカウンセリングの内容を振り返ったり、クールダウンをしたりすることができるのだが、オンラインであるとその機会がなく、カウンセリング場面と日常生活場面の切り替えが難しい。
・オンラインでのカウンセリングを拒む C1 に対しての対応について検討する必要がある。
【オンラインでエンカウンターグループ等のグループセッションを行うことについて】 ※エンカウンターグループ：Rogers, C.R. が開発した集団心理療法の一つ。10人程度の人たちが車座になって一つの部屋で座り、一日8時間程度共に過ごす。メンバーは自分の心の動きなどを自由に話す。
・ファシリテーターは、常に画面上のメンバーの様子に注意を払っていなければならない、息をつく暇がない。
・参加者数が多い場合、本人が声を上げなければその存在に気が付かれないことがある。
・対面形式の場合、グループセッションから離脱した参加者がいた場合、追いかけていき個別に事情を聴くことができるが、オンラインであるとそれが難しい場合がある（特に、参加者同士の面識がない場合や、メンバーが様々な国から参加している場合）。
【学会大会の実施について】
・オンライン会議ツールの利用について、操作が苦手な人へのサポート体制をとることが必須である。
・日本心理臨床学会は倫理的な配慮から学会をオンライン開催する際は発表で事例を扱うことは一切禁止した。しかし、本大会のように事例を扱う際のガイドラインを明示し、発表時には座長や大会スタッフがガイドラインを遵守していることを確認することで、発表時に事例を扱うことは可能である。
【全体を通して】
・物理的に C1 と Co が同じ場にいなければカウンセリングやグループが成り立たないというケースは、これまでのところない。しかし、そのような事態が生じた際の対応について検討しておくことは必要である。
・オンライン形式は時間的・経済的な負担が少ない。本大会でも、対面であれば参加できなかった海外や遠方に在住の参加者がいた。
・テキストベースや動画の視聴では、「今、ここで」生じている体験を扱うことは困難であるが、方法を工夫すれば十分オンライン形式で人間性心理学を実践することは可能である。

べられた。

これまで、人間性心理学の実践は対面で行うことが当たり前であったが、コロナ禍において対面での実践が困難となった。しかし、これは人間性心理学の実践が停滞する危機ではなく、実践の在り方を考え直す好機であったと考えられる。2020年4月7日に緊急事態宣言が発出され、多くの専門機関はカウンセリング業務を停止した。しかし、クライアントのニーズを考慮すると、長期間カウンセリング業務を停止することは望ましいことではなく、多くの専門機関は対面に代わる方法でのカウンセリングや心理療法の実践について検討することを余儀なくされた。そして、多くの機関で採用されたのが、Zoomなどのオンライン会議ツールを利用した遠隔カウンセリングであった。

オンラインで人間性心理学の実践を行う前、多くの実践家は「人間性心理学は対面でないと実践できないのではないか?」「オンラインではクライアントの微妙な表情の変化に気が付かないのではないか?」と心配していたが、いざ実践をしてみると、これらの心配は杞憂に終わることが殆どであった。大会準備委員会主催シンポジウムでは、人間性心理学の実践において対面には対面の、オンラインにはオンラインの良さがあることが確認された（詳細は表2を参照）。

日本人間性心理学会は、人間性を理解し、その回復と成長に貢献することを通じて、社会的に責任を果たし得る心理学の研究と実践を推進することを目的としている。日本人間性心理学会第39回大会の開催を通して、これまでスタンダードであった「参集して、対面する形式」だけが人間性心理学会の目的を達成し得るのではなく、オンラインというこれまでにない形式でも十分達成できることが明らかとなった。特に、学会年次大会の開催については、今後、コロナ禍が収束した際に、全てを対面形式に戻すのではなく、状況に応じて対面とオンラインを併用することで、上記の目的

をより多角的に達成することが期待できる。

日本人間性心理学会第39回大会の成果が、今後の人間性心理学の実践や、日本人間性心理学会年次大会の開催の礎となれば幸いである。

IX. 謝 辞

日本人間性心理学会第39回大会の開催にあたり、群馬パース大学には多大な支援を賜りました。関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

また、Zoomによるオンライン開催という初めての試みでしたが、全ての行程を大過なく進行できるよう準備・運営をしてくださった大会準備委員の皆様、手探りの状況の中、大会やワークショップに参加してくださった皆様にも厚く御礼申し上げます。

X. 利益相反

本論文の内容に関連する利益相反事項はない。

参 考 文 献

- 1) 中野 明. 人間性心理学入門. 東京, アルテ, 2019. p.188, ISBN978-4-434-25511-3.
- 2) American Psychological Association. "Society for Humanistic Psychology, About Us" <https://www.apadivisions.org/division-32/about/index> (参照 2020.12.14).
- 3) 畠瀬 稔. 日本における人間性心理学の歴史. 人間性心理学ハンドブック. 日本人間性心理学会編. 大阪, 創元社, 2012. p.30-38.
- 4) 日本人間性心理学会. "日本人間性心理学会とは". <https://www.jahp.org/> (参照 2020.12.17).

Abstract

The 39th Annual Meeting of the Japanese Society of Humanistic Psychology was held online through Zoom instead of meeting together-one of the traditional ways, in consideration of the COVID-19 pandemic. Though there was controversy over holding the online annual meeting of the Japanese Society of Humanistic Psychology, which emphasizes experiences that occur “here and now”, the 39th Annual Meeting was a good opportunity to discuss the future practice of humanistic psychology and the holding of the annual meeting of the Japanese Society of Humanistic Psychology. Through the 39th conference, it is hoped that by combining face-to-face ways with online ones, the practice of humanistic psychology and the annual conference of the Society will be able to achieve formats to achieve the objectives of the Society for Humanistic Psychology in more multifaceted way.

Key Words: Japanese Association for Humanistic Psychology, Humanistic Psychology, the COVID-19 pandemic, COVID-19